

山口県獣医師会会報

Monthly Report of the Yamaguchi
Veterinary Medical Association

第 752 号 令和 6 年 1 月

目次

○新年のご挨拶	1	
・田中尚秋会長	・山口大学共同獣医学部 度会雅久学部長	
・県畜産振興課 小川賀雄課長	・県生活衛生課 河村 章課長	
○年男・年女の抱負	4	
・宇部厚狭支部 米澤弘雄先生	・美祢支部 篠田稔彦先生	・岩柳支部 河上 茂先生
・宇部厚狭支部 網本昭輝先生	・岩柳支部 安堂光明先生	・山口支部 吉母修栄先生
・岩柳支部 三上俊樹先生	・豊浦支部 白尾大司先生	・宇部厚狭支部 粟屋貴子先生
・山口支部 岡野伸哉先生	・山口支部 田中昌子先生	・豊浦支部 前田翔一先生
・長北支部 相津康宏先生	・県庁支部 岡田朋子先生	・宇部厚狭支部 熊谷堯之先生
・豊浦支部 杉山弘樹先生	・県庁支部 鳴重寿人先生	
○令和 5 年度獣医公衆衛生講習会開催報告(殿河内英雄部会長)	10	
○令和 5 年度第 2 回小動物部会委員会開催のご報告(大黒屋勉部会長)	11	
○第 41 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会参加報告(酒井理常務理事)	11	
○熊ノ社(岩柳支部 三好雅和先生)	14	
○山口支部研修会参加報告(山口支部 伊藤博志先生)	15	
○ゾウの繁殖(徳山支部 藤原果南先生)	15	
○福島和彦先生のご逝去を悼む(山口支部 藤原宣義支部長)	16	
○事務局日より	16	



謹 賀 新 年

新 年 の ご 挨 拶

会長理事 田 中 尚 秋

明けましておめでとうございます。会員の皆様方をはじめ関係各位におかれましては、ご健勝にて新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中は、本会の諸事業の運営並びにその推進等に格別のご支援・ご協力・ご指導を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は、本会が懸案としていた事案についていくつか大きな進展がありました。

まず、災害時における動物救護対策について 6 月に県と「災害時における動物の救護に関する協定」の締結ができたことは大きな進展の一つであります。今後、災害が発生した場合、県の要請に基づき負傷した被災動物の治療や被災動物の保護及び健康管理等に関し、県と協力しながら対応に当たることになります。引き続き会員の皆様の強力なご支援・ご協力を賜りますよ

うどうぞよろしくお願いたします。

次にワンヘルスの推進についてですが、獣医公衆衛生部会の講習会を公開講座として開催し、県民の皆様へ周知を図りました。また、県議会議員(特に自民党関係)の先生方にご説明申し上げ、推進へのご協力をお願いするとともに、山口県健康福祉部に対して、「山口県感染症予防計画」に、ワンヘルス・アプローチの推進を盛り込んで、取組みを進めていただくようお願いしました。

この結果、現在パブリックコメントが実施されている新たな「山口県感染症予防計画(素案)」では、感染症の予防の推進の基本的な方向と役割の柱の一つに、ワンヘルス・アプローチが盛り込まれました。関係の皆様へ感謝いたします。

本会としても、関係機関等と連携して取組みを進め

てまいりたいと考えているところです。

続いて、新獣医師会館の建設に係る問題ですが、幾度となく検討会を重ね、だいたいの方向性を見出すことができました。今年度中に総務委員会、理事会等にお諮りして来年度総会時には皆様に概要等をご披露できればと考えているところです。

このように懸案事項が一気に解決の方向に向かえたのは、酒井常務理事を中心に事務局のご努力があったからこそであることを付記しておきたいと存じます。

懸案となっているマイクロチップの装着・登録制度の普及促進については、制度改革が進まない限り混乱は収まらないと思いますので、指定登録機関と認定されている日本獣医師会の今後さらなるご尽力を期待しているところです。

疾病動向の話としては、小動物、獣医公衆衛生分野では県内で相変わらずSFTS（重症熱性血小板減少症候群）の発生が多く見られており、この疾病は致死率も高く動物から人への感染も確認されていることから大いに注意する必要があります。先般、12月1日から3日間神戸国際会議場で開催された第41回日本獣医師会獣医学術学会年次大会でも「わたしたちの身近にせまる感

染症ワンヘルスの視点から新たな感染症と再流行する感染症を考える」のシンポジウムでマダニが媒介する新たな感染症としてエゾウイルス感染症と共に紹介され、サル痘(エムボックス)、梅毒等他の感染症と共に今後も新興、再興感染症の発生動向に大いに注意を払う必要があるとの警鐘がありました。

産業動物分野では現在、豚熱、高病原性鳥インフルエンザが続発し、予断を許さない状況となっています。コロナ過で一段とグローバル化が進んでいる現在、口蹄疫やアフリカ豚熱など越境性感染症の侵入の恐れも非常に高まっていると言わざるを得ません。家畜衛生分野の先生方は緊張の毎日をお過ごしのこととご推察申し上げますが、ご自身の体調管理にも万全を期していただきますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

輝かしい新年を迎えました。本年はいよいよ新しい獣医師会館の建設に着工し、できれば年内完成を目指してまいります。事業運営並びにその推進に向けて関係各位の尚一層のご協力・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、新年のご挨拶とさせていただきます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



新年のご挨拶

山口県獣医師会の皆様、新年明けましておめでとうございます。令和6年を迎えるにあたり、昨年のご報告と今年の抱負を述べさせていただきます。

世の中はポストコロナへと動き出しております。本学においても、マスクをとって活動する学生や教職員が増えてきました。講義と実習、そして教育研究に直接関係しない行事や課外活動においても、ほぼ制限なく実施可能となりました。

共同獣医学部では、2019年に欧州獣医学教育機関協会(EAEVE)認証を取得し、その後も教育の質向上を目指した改革を継続的に行っています。昨年はEAEVE認証の中間報告を提出し、「特に指摘する事項はなし」との回答を得ております。2025年に受審予定の次回審査に向けて、準備を行っております。

国際交流も継続して活発に行なっております。2021年から大学の世界展開力強化事業「アジア・アフリカにおけるOne Health問題の解決に向けた感染症対策を担う獣医師育成プログラム」が開始され、ナイロビ大学との本格的な交流が行われています。ナイロビ大学の教員と学生の受け入れが10名程度、および本学部の教員、学生、大学院生の派遣が15名程度の規模です。今

山口大学共同獣医学部 学部長 度会 雅久
年も引き続き交流活動を行う予定です。この活動は大学全体に波及し、アフリカの現状に興味を持つ他学部の学生が増え、実際に短期留学することになっています。また、JICA草の根事業「ジョグジャカルタにおける農業従事者の生活向上のための牛繁殖効率の改善」では、インドネシアのガジャマダ大学の研究者との相互交流も継続しています。今年はインドネシアで開催されるシンポジウムに複数の学生と教員が参加し、学术交流を進展させる予定です。

山口大学獣医学科は、2024（令和6）年をもちまして山口高等獣医学校の設置から創立80周年の記念すべき年を迎えます。山口高等獣医学校から共同獣医学部へと歩んできた道を振り返り、その軌跡を明らかにすると共に、今後のさらなる前進と飛躍を期し、記念事業を行いたいと考えています。記念事業の詳細については改めてご案内する予定です。

山口県獣医師会をはじめ学外諸機関の皆様には、今後も様々な場面で連携をお願いすることになりますが、引き続きご協力とご指導を賜れば幸いです。

終わりに、会員の皆様のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。本年も宜しく願い申し上げます。



新年のご挨拶

山口県農林水産部 畜産振興課長 小川 賀 雄

あけましておめでとうございます。

会員の皆様には、平素から畜産の振興に格別の御理解と御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、昨年11月25日に佐賀県の養鶏場で今シーズン国内初となる高病原性鳥インフルエンザが確認されました。また、昨年10月4日以降、全国各地で野鳥等からウイルス遺伝子が検出されるなど、本病の発生リスクが高まっていることから、引き続き厳重に警戒する必要があります。

県では、佐賀県での発生を受け、養鶏場への緊急立入を行い、飼養衛生管理基準の遵守や早期発見・早期通報を徹底するなど農場への指導を実施したところです。

また、万が一の発生に備え、必要な防疫資材を備蓄するとともに、関係団体や企業と防疫協定を締結し、防疫資材の調達、動員者の輸送等の協力体制を整え、危機管理体制を整備しているところです。

一方、一昨年3月以降、野生いのししで豚熱の感染が拡大していることを受け、翌4月から飼養豚等へのワクチン接種や野生いのししへの経口ワクチン散布等の発生予防対策を継続しております。

この他、アフリカ豚熱のアジアにおける継続的な発生に加え、昨年5月には韓国において口蹄疫が4年ぶりに発生するなど予断を許さない状況が続いております。

今後も生産者や関係機関、行政が緊密に連携しながら、緊張感をもって家畜防疫対策に取り組んでいくこととしております。高い見識と技術を有する会員の皆様の御支援、御協力をいただきますようお願い申し上げます。

結びに、山口県獣医師会の今後益々の御発展と会員の皆様方の御健勝、御活躍を祈念し、新年の御挨拶とさせていただきます。



新年のご挨拶

山口県環境生活部 生活衛生課長 河村 章

新年あけましておめでとうございます。

会員の皆様方におかれましては、新年を健やかに迎えのことで、心よりお慶び申し上げます。

新年を迎えるに当たり、当課の所管する動物愛護管理業務の一端を紹介し、御挨拶とさせていただきます。

まず、大規模災害時を想定した被災動物の救護について、昨年は、貴会など関係機関との連携体制の整備を進めることができた年となりました。

6月には、貴会とかねてより協議を重ねてきた「災害時における動物の救護に関する協定」を締結させていただきました。これにより、負傷動物の治療や避難所でのペットの健康管理など、災害時の救護活動に貴会からの円滑な支援をいただけることとなり、たいへん心強く思っています。

また、9月には、県地域防災計画に定める「動物愛護管理計画」を円滑に運用するため、関係主体の連携体制や具体的な取組について整理した「動物救護本部設置要綱」、「被災動物救護実施要領」を整備しました。

災害はないことに越したことはありませんが、有事の際には、この要綱、要領に基づき、貴会はもとより、市町や関係団体等と緊密に連携を図りながら、被災動物やその飼養者等に的確な支援を行っていきたく考えています。

また、災害時にペットを守るのはその飼主が基本であることから、マイクロチップ装着等による所有者明

示、しつけや健康管理、同行避難の必要性など、平常時における飼主への普及啓発にも取り組んでいるところであり、引き続き、貴会の御協力をお願いします。

次に、本県の大きな課題の一つである野犬問題については、市町や関係機関等と連携し、その解決に向け取り組んでいるところですが、依然として周南地域をはじめ特定の地域に多くの野犬が生息しています。こうした中、令和4年に周南環境保健所が試作した遠隔操作システムを備えた大型捕獲檻により、これまで捕獲が困難であった成犬を一度に複数頭捕獲することができるようになるなど、大きな成果が上がっています。

今後、このシステムの実用性や汎用性がより高まるよう技術改良を加え、他の地域へ導入することも検討しており、県民の安心・安全の確保に向け、捕獲の強化に一層取り組むこととしています。

県では、引き続き、人と動物との調和のとれた豊かな暮らしの実現に向けて、「山口県動物愛護管理推進計画」に基づき、施策を展開してまいります。貴会との連携が必要不可欠と考えています。貴会におかれましては、今後とも、本県の動物愛護管理行政への御理解と御協力を賜りますよう、どうぞよろしくようお願い申し上げます。

終わりに、公益社団法人山口県獣医師会のますますの御発展と、皆様の御健勝、御多幸を祈念し、新年の挨拶とさせていただきます。

年男・年女の抱負



新しい年を迎えて

宇部厚狭支部 米澤 弘 雄

新年あけましておめでとうございます。

皆様におかれても、よき日をお迎えのこととお慶び申し上げます。

私も、7回目の年男を迎え、84才になりました。これまで、多くの獣医師会諸先生方との交流を通じて様々な面に支えられ、今日あることに感謝申し上げます。

今さら、改めて抱負はありませんが、せめて人様の手を煩わすことのないよう、平素の健康管理を大切にしたいと思います。今後に残された時間は貴重でもあり、老いとの戦いでもあります。日々の体力・気力が勝負です。

心身ともに健康を維持するために運動・食事・頭の体操など、平凡ですが基本的な生活習慣に心掛け、体を構成する細胞の活性化を促進し、高齢に伴うロコモ・フレイルの予防に努め、日々の幸せに感謝する生活ができればと、思いを新たにしております。



皆さんと寄り添える者に

美祢支部 篠田 稔彦

「お正月とて 油断はおよし 又も来るぞえ 大晦日」(龍山)惰性に流れに流れて84年、非を知るばかり。

獣医師の先生をはじめ、あらゆる方々にお世話になり、ご迷惑をおかけして今日があることに漸くにして気付き、感謝の念の薄さを恥じております。

私の住んでいる所は、鹿・猪・猿・野兎などが昼夜を問わず出没する片田舎です。学童の減少に合わせて学校の統廃合によるスクールバス方式に慣れ、その内市街化区域並の通学になるでしょう。

我地区「堅田(かたた)」は清らかな「弁天池」の湧水が幾筋にも別れて田園風景を形作っている、緑豊かな土地です。古の人々は翡翠色に輝くこの湧水を心の拠り所として弁才天社を造営して祀り、五穀豊穡を願いつつ、その恵みに感謝してきました。一方、地区内住民が寄り添い、組織基盤の強化、効率的な事業展開を図る目的として、地方自治法に基づく法人格である認可地縁団体「堅田地区」としての規約をつくり、平成25年に美祢市から認可を受けました。これまで教わった技術や知恵の数々を活用して地域の皆さんと共に空水田6～8haに牧草の種子を播いて草の収穫、我家で耕作した野菜を弁天池の直売所へ出荷、完売の醍醐味は格別です。コロナ禍の中にありますが、エメラルドの弁天池を観光してください。弁天池周辺は夏涼しく冬は温かいです。地縁団体の認可はありがたいものです。後継者育成に役立ち、作物づくりの中から俚諺、俚謡、道歌の所以を学び味わいながら年相応の生活をしております。「世を渡る道はと問わば、兎に角に夫婦睦みて親子親め」今年は時々背筋を伸ばして、嫌がらせの年齢を自覚し、家内と口相撲をとりながらも地域の皆さんと寄り添える者になって過したいものです。

今年も益々のご清栄とご発展をお祈り申し上げます。



「バトンタッチ」

岩柳支部 河上 茂
(河上動物病院)

会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。

今年で6回目の年男を迎えることになりました岩国市在住の河上です。昨年は新型コロナ・インフルエンザと感染症の年でしたが、今年こそは安全な年にしたいものです。

私は動物病院を開業して45年になります。二代目の娘も子育てに余裕ができて臨床に励んでいますので、72歳を区切りとし、75歳までには病院をバトンタッチしたいと思います。今後とも会員皆様方のご指導・ご鞭撻を宜しくお願い致します。

最後に、会員皆様方のご健勝とご多幸を祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

私の人生訓

「確認を怠るな！思い込みは禁物」



年男の抱負

宇部厚狭支部 網本昭輝
(アミカペットクリニック)

県の獣医師会から原稿の依頼が来ています・・と女房、何の原稿だろうかと思ひながら見てみると、年男の抱負ということでした。人生色々な生き方がある中で、私は家庭を顧みず好きな(?)仕事をやりたい放題という感じでした。仕事、仕事、時々ゴルフ。気が付けば72歳という感じです。

最近長時間の手術や、農作業で疲れを感じるようになり、そろそろスローダウンしなければならないかと思っています。思えば、子供の運動会、試合の応援や日曜日の家を不在にし、仕事優先で福岡、大阪と朝早くから夜遅くまで、研究会、講習会、学会と出かけていました。それでも一度も不満を耳にすることはなく女房にはありがたく感謝しています。

始めて臨床を教えてくださいました橋本元秀先生もお元気で仕事をされていますし、大学院の主任教授であった中間實徳先生もお元気で教鞭を執っておられるし、私が弱音を吐くわけにもいかず、きっと頑張れるだけ頑張るのだと思います。

仕事ではこれから始まるという時期の獣医歯科学に出会えたことも幸運でした。長い人生何回もの分かれ道があり、その一方を選んで進んできて今日があり、色々な人に感謝の気持ちでいっぱいです。

年男の抱負ということですが、これまで以上に健康に留意し通常の生活ができるように努めたいと思います。



年男の抱負

岩柳支部 安堂光明
(安堂畜産株式会社)

2024年は甲辰(きのえたつ)です。ちなみに私は1952年生まれ壬辰(みずのえたつ)です。

辰は「振るう」という文字に由来しており、自然万物が振動し、草木が成長して活力旺盛になる状態を表しているといわれています。辰年がめぐってくるたびに、私は人生の大きな「振動」を体感しています。

1976年は前年に麻布獣医科大学卒業後、獣医師になりました。そして家業を継承のため、家畜商として全国津々浦の牛体市場に、買参人としてのキャリアをスタートしました。

1988年は安堂畜産株式会社を設立。

2000年は宮崎県で92年ぶりとなる口蹄疫が発生。獣医師として頭の片隅にしかない出来事でした。

2012年は前年に東日本大震災による原発事故が発生し、放射能による目には見えない敵との戦いがありました。また、同年富山県・福井県で発生した腸管出血性大腸菌による食中毒で、生食用牛肉に新たな規格基準が設けられ牛のタタキも対象となり、苦労して一年後、12月に生食用牛肉の製造許可を取ることができました。

2024年は、畜産業界や食肉業界にとって、前年の出来事である「円安」「穀物高騰」「物価高騰」などのキーワードが少しでも改善され、畜産業界や食肉業界に明るい未来がひらかれる年になる事を祈念します。



感謝

山口支部 吉母修栄
(山口県動物愛護センター)

今年度、県職員を退職することとなりました。皆様のご支援のお陰です。感謝いたします。県職員として、大したことはできませんでしたが、最近、廃棄物・リサイクル対策課で携わった世界スカウトジャンボリーの排水対策は評価が高かったと言われたので紹介します。

2015年8月にきらら浜において、約3万人規模のジャンボリーが開催されました。開催にあたる問題が、シャワー排水の処理で、海域への排出には地元の反対があり、浄化槽を設置すると数億円がかかります。

そこで、上司の才本課長から排水処理を検討してほしい、8月は一番暑い時だから打ち水がいいね、とも言われました。きらら浜には広大な空き地があり、農業用の灌水ホースを廻らせて散水すればいい、と思いついたものの、具体的な設計ができません。環境保健センターの角野さんに相談すると、すぐに対応していただき、二人で柳井のフラワーパークを見学しました。角野さんは、1ヶ月くらいで設計図を完成させ、おかげで仮設の散水装置ができました。当時の才本課長のさりげないヒントからできたもので、県職員生活の中で一番心に残る仕事になりました。



年男の抱負

岩柳支部 三上俊樹
(さくら動物病院)

新年明けましておめでとうございます。多分3回目の年男の投稿になります。3回目なので還暦です。

新年にあたっての抱負はと尋ねられても特にありません。でも、歳をとるに従って、いつも考えていることはあります。それは、運動をして体力や筋力をつけることです。

私の趣味はゴルフと犬の散歩です。特にゴルフは仕事を離れて友達と冗談を言い合いながら景色の良い場所で走ったり歩いたり、良い気分転換になります。

ただ、50歳を過ぎたあたりからショットの飛距離が日に日に落ちるのを実感し始めました。ゴルフは18ホールでの打数を競うゲームですが、私のような下手っぴほど飛距離にこだわります。打数よりむしろ飛距離です。同年代の仲間にはなるべく飛距離で勝ちたいのです。考えてるうちに10年経ってしまいました。それで体力筋力が必要なのです。

犬の散歩も登山道などを歩くと良い運動になり、犬も喜ぶので頻繁に行きますが、実家の休耕田をドッグランにしてみたら、犬は山よりドッグランの方が好きみたいでちょっと複雑です。



まだのびしろあるか

豊浦支部 白尾大司
(西部地区家畜診療所)

昨年のこと、診療所にて干支の話題になり、自分の次に若い杉山獣医師が同じ干支=12歳差ということに驚き、たまたま同席していた山口大学の実習生が「あ、僕も同じ辰年ですよ～」=24歳差ということに愕然とさせられました。38歳で思い切った転職から早くも10年目、当時小学生だった息子も18歳、まあそりゃそうだという話です。年を取ると人生観とか話したくなるので、今日は気ままにその話し。

私は、人は生涯においてやるべきことが3つあると思っています。1つ、自分の能力をなるべく成長させる、2つ、その成長させたものを使って何かしらより良きモノを残す、3つ、それを楽しんで行う。より良きモノとは人でも物でも何でもOK。

体力や記憶などに衰えを感じる今日この頃ですが、まだ何かしら自分の伸びしろを探しつつ、より良きモノづくりには本腰をいれ、悲観も苦難も楽しみながら精進していきたいと思えます。

終わりに「シュガー」より火の玉欣二の言葉

「ゆるくない時に、泣くヤツは三流、歯あ食いしばるヤツは二流だ。笑え、果てしなく。そいつが一流だ。」

どんな時も笑っていただける強い人間でいたいものです。

本年も会員皆様の御健康、御多幸をお祈り申し上げます。



新年のご挨拶

宇部厚狭支部 栗屋貴子
(山本動物病院)

新年あけましておめでとうございます。4回目の年女ということで、12年ぶりに会報に寄稿させていただくことになりました。

私は大学を卒業してから現在まで、宇部市の山本動物病院で代診として働かせていただいております。今年で23年目となり、いつの間にか被雇用者としては最年長となっております。日々診療に携わる中、喜怒哀楽しながらあっという間に時間が過ぎていった気がします。

院長の庇護の下自由に仕事をさせてもらっていましたが、院長が近々病院を閉じることを決めたことで、この先どうすべきか考えるようになりました。元々自分はあまり獣医師に向いていないと思っていて、確固たる自信も持たずにいたのですが、やっぱりこの仕事が好きで、まだ獣医師として働きたいという強い気持ちがあることに気づきました。

今までの仕事の中で飼い主さんから私に求められていたのは、高度なテクニックや専門性というよりも傍でじっくり話を聞いてあげる事や、話をしやすい雰囲気作りだった気がするのでそこを忘れず、少しずつではありますが自分が目指す獣医師像を思い描きながら、独り立ちをしていく準備をする1年にしたいな、と思う今日この頃です。



年男の抱負

山口支部 岡野伸哉
(ほんゆら動物病院)

今年年男を迎えるにあたって、気を張りすぎずに自然体で過ごすことを目標にしたいと思います。私は子供の時から大人に言われることにことごとく反発してきました。当時の大人の考え方に「なんで?」と思うことが多かったからです。しかしインターネットやSNSの普及によって社会が変わってきました。

以前は物事の情報が少なく考え方が偏っていたり思い込みが多かったり、それらを周りに押し付けていたように思います。しかし今はもっと手軽にたくさんの意見や考え方に触れることができ「こういう考え方や見方があるんだ」と共感できるようになってきていると思います。

それによって人の生き方や考え方の多様性が受け入れられてきていることは私にとっては望ましい変化です。自分を取り巻く窮屈さがだいぶ取れてきて生きやすくなったと思います。ですので以前よりリラックスして仕事ができている感じがしています。

飼い主さんとペットの関係もそれぞれ多様な関係性があります。獣医師が考える治療を無理に押し付けることなく飼い主さんとペットがより幸せに思えるような獣医療を提供できればいいなと思っています。



効率化で叶える!?ワークライフバランス

山口支部 田中昌子
(田中獣医科医院)

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

県庁退職後、開業して牛の繁殖診療に携わりながら、関係機関の獣医業のお手伝いをさせて頂いております。超微力ですが、人手不足の折、何かお役に立てれば幸いです。

しがたフリーランスの身になったので、獣医学的に興味あることは全部体験してみようと、まるで学生時代に帰ったかのようにワガママに動き、皆様にお世話になっております。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

畜産試験場に勤務の頃、他県の方々と共同試験を組んでおり、おおいに刺激を受けました。彼らは受精卵の業績をバッチリ出してくるのですが、決して仕事一辺倒ではなく、趣味にも深く傾倒しているのです。格好良くて、ワークライフバランスの取れた理想形に感じました。

自分には全く余裕は無いのですが、理想に近づくべく無理やり習い事を差し込み、自ら追い込まれる生活を続けてきました。獣医師業はさぼらずに、どうかパイプオルガンとチェロの演奏は続けたい。昔は睡眠を削って両立を図りましたが、もう体力がもたない! 今後は効率化によって、なんとか欲張りな人生を目指したいと思います。



年男の抱負

豊浦支部 前田翔一
(下関農林事務所畜産部)

会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。

下関農林事務所畜産部の前田です。今年で3回目の年男を迎えることとなりましたので、前回の年男の年からの12年を振り返ってみようと思います。大学卒業後、神奈川県の小動物臨床病院へ就職し、4年間勤務した後に山口県へ入庁しました。入庁後は柳井、長門、県庁、下関と4か所の所属を渡り歩き、プライベートでは結婚、住宅の購入など、自身を取り巻く環境が目まぐるしく変わり続けた12年間でした。

今年の干支である「辰」について調べてみたところ、「ふるう、とどのう」という意味があるそうです。これに倣い、今年はじっくりと腰を据えて自身の環境を整える1年にしたいと考えております。

新型コロナウイルス感染症が落ち着いてもなお、物価高や、ウクライナ侵攻、パレスチナ問題など不安定な情勢が続いておりますが、今年1年が会員の皆様にとって幸福に満ちた1年となりますよう、心からお祈り申し上げます。



年男の抱負

長北支部 相津 康宏
(あくあ動物病院)

年男の抱負という依頼を頂きましたので、なにか抱負を書かないといけないのですが、だいたい3日坊主で長続きしない性格ですので、目標を立ててそれに向けて達成をするといったことに向いてない性格です。

そういった性格ではありますが、我が子も上が5歳となり、子供のためになることで一緒にできることがあれば続くのではないかと思います、ふと以前からなんとなく思っていたことをこの機会に実践してみようと思います。それは“図鑑作成”です。小学生の頃に“かわのぬし釣り”というテレビゲームにはまっており、川や海で釣った魚を図鑑にしている、最終的に川の主(なんの魚だったかは忘れました)を釣りあげる、といった趣旨のゲームに没頭しておりました。

長門市に帰ってきて、海が近くいろいろな魚も釣れるので、いろいろな種類の魚を釣りたいと思っておりましたが、それを子供と一緒に写真に収め、名前や特徴と一緒に図鑑にするというのは、子供の教育にも非常にいいのではないかと思います。

ということで、今年は図鑑作成にチャレンジしてみようと思いますが、蛙の子は蛙ですので、二人揃って三日坊主に終わるかもしれません。



年女の抱負

県庁支部 岡田 朋子
(山口県生活衛生課)

新年あけましておめでとうございます。

今年は、自宅の庭に植えている植物にバッタの被害が出ないようにこまめに観察することを抱負にしようと思います。

数年前、庭にバッタが増殖して以降、金木犀の新芽やペパーミントの葉がすべてなくなるようになったので、おそらくバッタが原因と推測しています。紫陽花や風船葛にはそのような被害が全くありません。紫陽花の葉に毒があるという話を聞いたことはありますが、風船葛はなぜ食べられないのか不明です。

ペパーミント等のハーブは雑草のようにたくましく増殖し、庭を覆いつくすイメージがあったのですが、バッタには敵わなかったみたいです。もしかしたら、プランターに植えているから敵わなかっただけで、地面に直接植えしていたらまた違ったかもしれません。ただ、そのペパーミントは完全に枯れたわけではなく、1年ぐらい何も生えなかったのですが、昨年の秋に放置していたプランターからまた生えてきました。これまでは土日を中心に様子を見ていましたが、食べ尽くされないように平日の朝も様子を見ようと思います。



新年の抱負

宇部厚狭支部 熊谷 堯之
(くまがいペットクリニック)

明けましておめでとうございます。おかげさまで今年も新年の幕開けを迎えることができました。ご承知のように、本年は『辰年』、動物にあてはめると『龍』の年で、十二支では5番目に数えられます。十二支の中で、唯一、架空の生物であり、その由来は中国では龍は麒麟、鳳凰、霊亀(想像上のカメ)とならんで、四種の霊獣の一つであり、中国の王様は龍の生まれ変わりであるため最も力がある動物とされているそうです。また、中国の『漢書 律曆志』では、辰は「ふるう、ととのう」を意味する「振」で、陽気が動いて万物が振動し、草木もよく成長して形がととのった状態を表すそうです。

当院も、開院して間もなく3年が経過します。日々の診察の中で、良いこともあれば、悲観に暮れることもしばしばあります。獣医師が精神的に参ってしまいやすい職業であることを、開業してからさらに実感できる3年間でもありました。その中で、現在の自身に一番必要なマインドはまさしく『ととのえる』ことだと思っています。獣医師として、経営者として、父親として。龍が如く天に伸びるほど、人間としての成長ができるよう、日々の行動や気持ちの在り方を整えていけるように精進いたします。



年男のほう…ふう。

豊浦支部 杉山弘樹
(西部地区家畜診療所)

新年あけましておめでとうございます。

ほう…もう36歳になるのですね。この執筆依頼を受け、百代の过客の疾さを身に染みて感じる今日この頃です。まだまだ若いと信じているものの、20代の頃と比べるとやはり体力は衰え、食べたら食べた分しっかりと脂肪が付くようになり、ここ数年は健康に気を遣うようになってきました。

思えば4年前からのコロナ禍、外出を控え、運動も減り、家で晩酌してばかりの生活がしばらく続きました。1年ほどして気付いたときには時すでに遅く、全身プヨプヨに。それから一念発起して、筋トレと食事制限に励み、努力の甲斐あって去年の今頃には体脂肪率9%台まで落とすことに成功しました。以降、最近まで多少増減しつつも維持できていたのですが、11月からコロナ明けで復活したイベントが目白押し。県外出張で暴飲暴食、からのコロナに罹りしばらく運動できず、快復したら研修旅行で暴飲暴食、そして12月の忘年会へ。気づけばまたお腹周りに脂肪が！ヒトはこうまでコロナウイルスに弄ばれるのか！！(?)

ということで、今年の抱負は割れた腹筋を取り戻すことです。とはいえこれから新年会シーズン。やれやれ、一体いつになることやら…ふう。



年男の抱負

県庁支部 鳴重寿人
(山口県畜産振興課)

新年あけましておめでとうございます。

昭和63年生まれということで、生まれた年を除けば、3回目の年男になります。今後ともよろしく願っています。

過去2回の辰年を振り返ってみました。1回目(平成12年、小学6年生)、獣医師になるなんて、微塵も思っておらず、将来の夢は？と聞かれたら「将棋の棋士」と無邪気に答えていた頃。少しだけ結び付けようとするなら、ミニチュアダックス・コイ・熱帯魚・カメなどなど父親の趣味で色々な動物がいたような気がする。2回目(平成24年、大学6年生)、なんとなく小動物病院に勤めるんだらうなと思いながら獣医学部に入學したものの、いつの間にか路線変更し、なんとなく公務員になろうと思った頃。そしてその時の予定通り？現在に至るまで県職員をしております。

さて、本題となる抱負。何の面白みもないですが、育ち盛りの子供含め家族の健康が一番ということで、健康に留意です。普段は大した運動をしないので、適度な運動と、すぐに飲みすぎてしまうのでお酒は程々にしたいと思います。

謹んで新年のご祝詞を申し上げます

旧年中の御厚誼を深く感謝いたしますと共に本年も何卒よろしく御指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年(2024年)

理事

会長理事 田中 尚秋
副会長理事 白永 伸行
常務理事 酒井 理
理事 石井 俊昭
大石 大樹
後藤 孝一
佐伯 優紀 恵
高橋 学
中村 滋
新田 直正
松延 佐知子
森崎 次郎
脇本 雄樹

監事

白銀 政利
水原 孝之
柳澤 郁成

支部長

岩 柳 奥原 達朗
熊 毛 河村 和俊
徳 山 橋本 介志
防 府 中野 正司
山 口 藤原 宣義
美 祢 吉村 正道
宇部厚狭 網本 昭輝
長 北 大田 悦三
豊 浦 水藤 創
下 関 山中 俊樹
県 庁 河村 章
山口大学 高木 光博

部会長

産業動物部会 大石 大樹
小動物部会 大黒屋 勉
獣医公衆衛生部会 殿河内英雄

会報編集委員

古澤 剛 横山 明宏
菅原 淳也 前田 翔一
三谷 藍 原田 秀明
豊川 剛 大山 ゆき
鹿島 貴朗 上林 聡之
石村 麻莉乃 酒井 理
羽迫 広人

令和5年度獣医公衆衛生講習会開催報告

獣医公衆衛生部会長 徳山支部 殿河内 英雄

(山口県周南健康福祉センター)

令和5年11月19日(日)、山口グランドホテル(山口市)において令和5年度獣医公衆衛生講習会が開催されました。

今年は、「なぜ、今、ワンヘルスカ?～獣医師にとってのワンヘルス～」と題して、福岡県獣医師会副会長で、アジア獣医師会連合会 (FAVA) ワンヘルス福岡オフィス事務局長も務められている今村和彦先生に御講演をいただきました。

獣医公衆衛生講習会は、例年、市民公開講座として実施しており、今年は中国地区獣医師会連合会の講習会も兼ねているため、対面とオンラインを併用したハイブリッド開催としました。当日は、県内外の会員の先生や山口大学の学生さん等、会場45名、オンライン48名の方が参加されました。

令和元年末に発生した新型コロナウイルス感染症をはじめとした新興感染症の多くは、人獣共通感染症で、森林開発など自然環境へ負荷を与える行為や、これらに伴う地球温暖化や生態系の劣化、人と動物の関係性の変化など、さまざまな要因が複雑に関係し、元々野生動物が持っていた病原体が人へ感染するようになったと言われています。

このような、さまざまな分野にまたがる問題に対応するには、人と動物の健康と環境の健全性を一つと捉え、一体的に守っていくワンヘルスの取り組みが重要となります。

ワンヘルスに向けた取り組みが最も進んでいる福岡県では、県民、県民が愛護する動物の命と健康、環境の健全性を一体のものとして守り、その活動を次世代に継承していくため、令和3年1月に「福岡県ワンヘルス条例」が制定されました。

また、条例に基づき、施策や取り組みを体系的に整理し、ワンヘルスの実践の仕組みを構築するための「福岡県ワンヘルス推進行動計画」が策定されました。

計画の具体的な取り組みとして、ワンヘルスの課題に対応する実践拠点となる全国初の「ワンヘルスセンター」の整備が進められています。ワンヘルスセンターは、人の健康や環境保全に関する調査・研究を行う「保健環境研究所」と、家畜、愛玩・展示動物、野生動物の保健衛生を一元的に担う「動物保健衛生所」を中核とする施設で、人・動物・環境の各分野に関する一体的な調査・研究や専門人材の育成などを進めていくこととされています。

講習会では、このような取り組みを行う福岡県でワンヘルスの中核を担われている今村先生により、ワンヘルスの6つの柱である、①人と動物の共通感染症対策、②薬剤耐性菌対策、③環境保護、④人と動物との共生社会づくり、⑤健康づくり、⑥環境と人と動物のより良い関係づくりを分かりやすく説明していただきました。

また、先生は、ワンヘルスとは、人、動物、環境全て、すなわち地球のウェルビーイングの向上に向けた理念であり、これを中心となって進めていくことが我々獣医師の役割であると述べられました。

山口県では、ワンヘルスの理念がまだ浸透しておらず、取り組みもまだ始まっていない状況であり、県獣医師会としては、このような市民公開講座等、様々な機会を通じて普及啓発を積極的に進めていく必要があると感じました。



講師の今村和彦先生



司会の坂本聡部会委員



謝辞を述べられる殿河内部会長



講習会会場の様子

令和5年度第2回小動物部会委員会開催のご報告

小動物部会長 岩柳支部 大黒屋 勉

(みさお動物病院)

2023年12月7日(木)に開催されました、令和5年度第2回小動物部会委員会についてご報告させていただきます。

各支部小動物部会委員計10名の先生方にご出席いただき、「①狂犬病予防注射実績について」「②指定獣医師の新規指定及び解除について」「③狂犬病予防に係わる啓発ポスター・チラシについて」「④小動物部会講習会について」「⑤被災動物救護実施要領の制定について」「⑥中国地区獣医師開業部会委員会について」その他を含め、以上6つの各議題について協議を行いました。

集合注射頭数は合計24,029頭で、昨年より1,342頭の減少となりました。犬の飼育頭数が減少している昨今、接種率の維持向上には飼主様へのより一層の周知と啓発が重要であるとの意見で一致しました。

また議題②について、各支部の先生方の新規指定(3名)および指定解除(5名)が承認されました。

議題④、令和5年度の小動物講習会では第1回は小動物救急医療として塗木貴臣先生を、第2回は整形外科として枝村一弥先生をお招きして、対面で開催することとなりました。最新の情報も含め、幅広い内容となる予定ですので、是非多くの会員の皆様にご参加賜りたいと存じます。

議題⑤については、本年6月に山口県との間で、被災動物救護に関する協定を締結した旨の報告を受

けました。自然災害等に備え、支部単位でも市町村などと連携について事前に協議しておくことは非常に重要であると感じます。

議題⑥では、「マイクロチップによるワンストップ制度の進捗」および「チーム医療体制づくりに関する各県の対応」について会議に参加した私から説明させていただきました。マイクロチップによるワンストップ制度については、登録手数料の問題や転入出時の手続きの煩雑さなどから中国地区で新たに導入した自治体はありませんでした。

また、本年度から国家資格として誕生した、愛玩動物看護師とのチーム獣医療体制については、各県共に今後の課題として考慮されているものの、獣医師会としての対応は行っていないとのことでした。

また、その他として集合注射会場における領収書の対応(インボイス制度に関して)や、獣医療広告制度の見直しについて、学校飼育動物支援における治療費用の請求についてなど、多くの内容について討議を行いました。

制度の変更などにより生じる疑問などを話し合える有意義な場として、会員の皆様におかれましては今後とも小動物部会の活動にご意見を賜り、部会の運営にご協力頂きます様、重ねて宜しくお願い申し上げます。

第41回日本獣医師会獣医学術学会年次大会(令和5年度)参加報告

常務理事 酒井 理

令和5年12月1日(金)～3日(日)、神戸国際会議場において開催された獣医学術学会年次大会に、田中尚秋会長理事、白永伸行副会長理事と共に出席しましたので、その状況を報告します。

《表彰》

第2日目13時から日本獣医師会獣医学術賞の発表と授与がありました。本会からは、小川祐生先生(アマカペットクリニック)が、小動物部門の獣医学術奨励賞を受賞されました。

《本会関係者講演等》

本会関係者から次の4演題の講演がありました。また、奥田優先生(山口大学共同獣医学部)がシンポジウム「アジア獣医専門医制度」の、田浦保穂先生(山口大学共同獣医学部)が「日本産業動物獣医学研究報告」の座長を務められました。

①シンポジウム「アジア獣医専門医制度について」

「アジア獣医外科学専門医協会の現況」

谷 健二先生(山口大学共同獣医学部)

②日本獣医公衆衛生学会 地区学会会長賞受賞講演

「大学キャンパス内の野良猫数管理において奏功した事例」

福永千茅さん(山口大学共同獣医学部)

③日本小動物獣医学会「獣医学術奨励賞」受賞記念講演

「ミニチュアダックスフントの上顎犬歯歯周病の特徴的な進行パターン」

小川祐生(アマカペットクリニック)

④日本小動物獣医学会 研究報告

「モルヌピラビルで治療を行った猫伝染性腹膜炎

について」

白永伸行(シラナガ動物病院)

《シンポジウム等》

各分野で様々なテーマのシンポジウムや講演があり、私は、主に獣医公衆衛生関係のシンポジウム等に参加しましたので、紹介します。

○日本獣医学会シンポジウム「アジア獣医専門医制度について」

- 北米や欧州では、獣医療各分野の専門医協会が専門医認定制度を確立しており、アジア地域も、これらを参考に、皮膚科、眼科、内科学、外科学、野生動物医学分野で専門医制度の取組みが進められている

- 皮膚科での取組みが最も進んでおり、2005年に設立されたアジア獣医皮膚科専門医協会は、2011年から専門医を目指す獣医師(レジデント)研修制度を開始し、これまでに8名の正規レジデントと2名の代替レジデントが誕生した

- アジア獣医専門資格を取得して国際獣医専門医としての質が保証されても、他国で獣医療を行うためにはその国の獣医師免許を取得する必要がある

○シンポジウム「知っておきたい海産魚介類の自然毒による食中毒」

- 動物や植物の中には、人や動物に有害な影響をもたらす物質を含むものがあり、これを「自然毒」と呼んでいる

- 自然毒による食中毒発生件数は少ないが、毎年死亡例が報告されており、令和4年度は、フグと有毒植物のイヌサフラン、グロリオサの誤食による

死亡例があった。これらの観賞用植物は、家庭菜園と別の場所に植える必要がある

- シガテラ中毒は、海産物による自然毒食中毒としては、世界最大規模で、毎年数万人の患者発生が推定されている。国内では、主に沖縄県で発生しており、バラハタ、バラフエダイ、イッテンフエダイなどの肉食魚の喫食により、冷たいものに触れた際に、痛みや電氣的刺激のような感覚をもたらす「ドライアイスセンサーン」などの症状が現れる
 - フグ中毒は、西日本で発生が多く、広島県、兵庫県、山口県、福岡県、長崎県の5県で、全体の4割以上を占め、約7割が家庭で発生している。フグの漁獲量の多い北海道、石川県、愛知県などではフグ中毒は少なく、肝臓等の有毒部位を喫食する食文化により食中毒が起こっている
 - フグの種類・部位により毒力が異なり、種間交雑による種類や毒力が不明なフグが多くなっている
 - 貝毒による食中毒は、毒を産生するプランクトンをホタテガイ、マガキ、アサリ等二枚貝等の捕食者が捕食することで胎内に毒を蓄積し、さらに毒化した二枚貝を人が摂食することにより発症する
 - 貝毒は、症状により、麻痺性貝毒、下痢性貝毒などに区分されている
 - ※山口県でも貝毒プランクトンの発生があり、水産部局においてプランクトンの発生状況や貝毒検査を行い、規制値を超えた場合は、漁協等を通じた二枚貝の出荷自主規制措置や住民に対する採捕禁止の注意喚起等が行われている
- シンポジウム「近年注目すべき寄生虫性食中毒」
- 2013年に食品衛生法の食中毒事件票が改正され、アニサキス食中毒が食中毒統計において個別集計されるようになり、患者を診察した医師が保健所に届け出るようになった
 - このため、2018年以降、アニサキス食中毒が細菌やウイルスによる食中毒を押さえて、最も多い食中毒発生件数となった
 - 刺身や寿司などを食べる際は、複数の生魚を同時に食べるため、原因となる魚を特定するのは難しいが、単品の魚料理では、「シメサバ」が原因となったものが最も多い
 - いまだに、酔でアニサキスが弱く思っている人がいる（酔に漬けるとアニサキスはかえって元気になる）、天然の海産魚介類には多くの魚種にアニサキスが寄生しているので、生食する場合は、冷凍処理する必要がある
 - 天然の鮭には、アニサキスが100%筋肉中にあるため、生食しないこと
 - 養殖魚の場合でも、種苗の段階での寄生や生餌からの寄生もあり、注意が必要
 - 平成14年頃から、生食用生鮮食品を喫食して数時間後に、一過性の嘔吐や下痢を発症する原因不明の食中毒が多発し、ヒラメの筋肉内に寄生するクドア属粘液胞子虫が原因であることが判明した
 - 筋肉1gあたり106個を超えるクドアが寄生したヒラメは、食品衛生法違反として取扱われている
 - Sarcocystis(獣肉胞子虫)は、中間宿主の筋肉中にシストを形成する寄生原虫で世界中に分布し、爬虫類、鳥類から哺乳類まで多種多様な動物が宿主になる
 - 馬肉の獣肉胞子虫による食中毒が問題となり、「馬刺し」としての提供方法を変えない失活方法として、中心温度-20℃48時間以上の凍結方法が有効であることが示された
 - 獣肉胞子虫は、多種多様な動物に寄生することから、増えすぎた野生鳥獣を捕獲し、ジビエとして

利用、消費する際には、十分な加熱処理が必要である

- 我が国の旋毛虫（トリヒナ）は、野生動物内で維持されており、長期間冷凍保存された加熱不十分な熊肉の喫食により食中毒が発生している
 - 旋毛虫は、耐冷性が高く、ジビエの調理には、ロースト等の中心部の温度管理が難しい方法ではなく、鍋料理等、十分な加熱処理を行う必要がある
 - 顎口虫は、東北から九州まで広く分布しており、青森県東部地域において、2022年から2023年までに皮膚爬行症の患者が300人報告された
 - 患者1人の皮膚病変部から顎口虫が検出された。多くの方がシラウオ（山口県のシラウオとは別）を加熱せずに食べていた
- シンポジウム「ワンヘルスの架け橋：日本とアジアにおける人獣共通感染症と教育の展望」
- 2012年末に致死率27%のSFTSウイルスによる死亡患者が報告され、以降、西日本を中心に現在では100名以上の患者が毎年発生している
 - 2014年には69年ぶりにデング熱が東京で流行、2016年には23年ぶりのダニ媒介脳炎が北海道で発生、2019年には新規ウイルスであるYezoウイルスによる患者が北海道で発生した
 - 2019年にはBウイルスによる患者が報告され、2020年1月にはSARS-CoV-2によるCOVID-19の国内発生が報告され、現在も流行は継続している
 - 2020年には愛知で狂犬病患者が報告され、2022年にはエムボックスの国内患者が報告され、2023年には新規ウイルスであるOzウイルス感染による死亡例が世界で初めて報告された
 - 最近10年間でも国内で数多くの動物由来感染症が発生しており、早急なOne Healthアプローチの実践が求められている
 - 日本における狂犬病予防対策の成功は、飼育犬の登録・ワクチン接種、野犬等の抑留に獣医師をはじめ多くの国民・行政官が努力した結果であり、世界に誇るべきワンヘルス・アプローチの成果である
 - ワンヘルス・アプローチは非常に大きな試みで漫然として何をすればよいのかわからないという声を聞くが、獣医師が飼主にマダニ忌避剤投与の重要性を説明し、マダニ対策を進め動物を守り、飼主を守ることも、ワンヘルス・アプローチである
- シンポジウム「愛玩動物看護師制度の未来」
- 愛玩動物看護師の「診療の補助」は、「診療の手伝い」ではなく、獣医師のみが行うことができる診療行為の一部を獣医師の指示のもとに担うことができるもの
 - 臨床現場で、「診療の補助」に該当するか判断するためには、少なくとも次の4つの項目を満たしているかが目安になる
 - ①獣医師による指示がある
 - ②研修・教育等により、当該獣医療行為を実施するための知識と技術があることを実施する愛玩動物看護師、指示する獣医師の双方が確認できている
 - ③行政からの通知により当該獣医療行為が診療の補助から除外されていない
 - ④法律によって当該獣医療行為が禁止されていない
 - 日本動物看護協会は、2009年に設立された動物看護職の職能団体で、全国4支部、3千人で構成されており、組織強化に取り組んでいる
 - 協会としては、愛玩動物看護師の新たな業務である診療補助業務を適切に実施できる技術の習得を支援していきたい
- 農林水産省による獣医療広告制限見直しに関する説明会

- ・令和6年4月から獣医療広告制度の見直しが適用され、獣医師に関する情報や診療内容に関する広告の制限が解除されるとともに、バナー広告以外のWEB情報についても、獣医療広告3要件（「誘引性」、「特定性」、「認知性」）を満たせば広告制限の対象となる
 - ・獣医療広告ガイドラインを参考に、動物病院の広告やホームページなど確認して欲しい。具体的な表記の方法などは、管轄の家畜保健衛生所に相談されたい
- 日本医師会・日本獣医師会・厚生労働省連携シンポジウム「わたしたちの身近にせまる感染症」
- ・かつて伝染病（感染症）は最も恐れられていたが、病原体の発見、検査法や診断法の進歩、抗菌薬やワクチンの開発と普及、衛生環境の向上、栄養状態の改善、そして医療そのものの向上により、人々は感染症に対して安心して暮らせるようになってきた
 - ・しかし、これまでに存在しなかった感染症や感染症であることが明らかになった疾患（新興感染症）、姿を消してしまったかのように考えられていたが、再び、あるいは姿を変えるなどして再登場してくる（再興感染症）ことがわかってきた
 - ・感染症が再び私たちにとって身近な警戒すべき問題として戻ってきた大きな要因として、①人口の増加そして都市化 ②集団的な生活機会の増加 ③食習慣、性習慣などの生活習慣の急速な変化 ④自然環境の破壊 ⑤人の居住地の拡大による人と野生動物の距離の接近 ⑥交通機関の発達による人と物の大量・短時間での移動などが挙げられる
 - ・感染症は、気がつかない、あるいは不注意であると、いつの間にか感染が拡大する可能性があり、一人ひとりが感染予防に努めることは、家族、友人、隣人の感染を防ぐことであり、ひいては社会全体を感染症から守ることになる
 - ・近年のシーケンス技術の発達によって、マダニ中にはSFTSウイルスやエボウイルス以外にも実に多種多様なウイルスが保持されていることが明らかとなってきた
 - ・マダニが媒介するウイルス感染症への注目が集まる中、マダニ中のウイルス探索と、発見されたウイルスのリスク分析をさらに充実させていく必要がある
 - ・エムポックスは、急性発疹性疾患で、限局性から全身性の皮膚病変を主徴とする人獣共通感染症で、多くの動物が感染する
 - ・多くの動物がエムポックスに感受性であるため、根絶することは困難であり、輸入げっ歯類を起源とする流行が米国で起きたことから、エキゾチックアニマルとして野生動物を捕獲、輸入して飼育することはリスクがあり規制が必要
 - ・梅毒は感染症法の五類感染症に属し全数報告の対象疾患であるが、現在の届出は氷山の一角
 - ・若い医師は梅毒の臨床経験が少なく、昔の病気と知っている方も多いが、その届出数は2011年以降徐々に増加し、さらに2013年以降届出数は急増している
- ※講演要旨が必要な方は、本会事務局に連絡してください。



「日本獣医師会獣医学術賞授賞式」左から5人目が獣医学術奨励賞を受賞された小川祐生先生、6人目が日本獣医師会 藏内勇夫会長



シンポジウム「アジア獣医専門医制度」左から4人目が発表された谷健二先生、右端が座長を務められた奥田優先生



「獣医公衆衛生地区学会賞受賞講演」山口大学共同獣医学部 福永千茅さんの発表



日本医師会・日本獣医師会・厚生労働省連携シンポジウム「わたしたちの身近にせまる感染症」会場

熊ノ社

岩柳支部 三好雅和

宮崎県と大分県の県境にまたがる祖母・傾山系の障子岳の山頂(1,703m)に高さ50cmくらいの石碑があります(写真1、2)。障子岳は過去何度も来ていますが、この石碑は山頂を示すものと思っていました。今年の晩秋に登った際、よく見ると「熊ノ社」とあり、山頂名ではないことに気づきました。調べてみると明治14年に射殺されたツキノワグマの慰霊のために建立され石碑でした。障子岳の近くには親父山(1,644m)という山がありますが、「親父」はクマを意味するらしく、この地域にはかなりのクマが生息していたようです。捕獲されたクマの毛皮、肉、熊の胆などが利用され、その恵みを感謝する意味で「熊ノ社」を建立したのでしょう。しかし、その後クマは減少し、最後に捕獲された記録は1941年です。また、1957年に山中で1頭の子グマの死体が確認された以降、クマの存在は確認されなくなりました。理由は不明ですが、継続的な森林伐採・改変(ドングリなどの広葉樹の伐採、針葉樹の植林)や狩猟のためではないか、といわれています。なお、1987年に1頭が捕獲されましたが、その後の遺伝子

解析で本州中部地域のクマが人為的に持ち込まれたと結論付けられ、2012年に環境省は「九州ではすでにツキノワグマは絶滅している。」との見解を発表しています。

この山域ではツキノワグマは絶滅した一方で、現在、シカが増えすぎて森林の食害が大きな問題となっています(夜にはシカの鳴き声がよく聞こえます)。クマの慰霊碑である「熊ノ社」付近はシカの食害防止用の金属ネットが張り巡らされており、野生動物の「絶滅」と「増え過ぎ」を象徴するものが同居する複雑な風景でした(写真1、3)。また、祖母山の宮原登山口では写真4のような「クマに注意!」という看板がありました。一昨年来た時にはなかった看板です。九州でクマが見つかったという確かな情報はありませんが、今年は全国でクマ騒動があったこともあり、「念のため」ということかもしれません。加えて、山中ではクマに限らず野生動物や自然環境に注意を促す警句として受け止めるべきかもしれません。



障子岳山頂(1,703m)、霧水に覆われた「熊ノ社」とシカ防除ネット



「熊ノ社」



障子岳山頂 シカ防除ネット
(金属製の支柱とネット)



祖母山(1,756m)の宮原登山口

山口支部研修会の開催について

山口支部 伊藤 博 志

(山口農林水産事務所畜産部)

さる12月6日、山口市湯田温泉の防長苑において、山口支部研修会が開催されました。講師に山口県環境保健センターの調恒明所長を迎え、「最近話題のウイルス感染症について」と題し講演をしていただきました。

世界的な流行により日本人の生活も一変させた「新型コロナウイルス感染症」を中心にお話は進みました。令和2年3月、県内で初めての感染者が確認された際の対応をはじめ、国内で大流行した時期に国及び他県の関係機関と連携し、検査機関のトップとして収束に向け多大なる尽力をされた様子が、講演の中で語られました。5類感染症への移行の際の苦労されたエピソードなども交え興味深く聞かせていただきました。

また、SFTSやサル痘など最近話題の感染症につい

ても専門家ならではの知見を提供いただき、参加した23名の会員も、関心の高い内容とあって熱心に聞き入っていました。

講演の後には、調所長を交えた懇親会でおおいに親睦を深めることができました。来年は、人類とウイルスが平和に共存できる一年なることを願うばかりです。次回はより多くの会員の皆さまの参加をお待ちしています！



ゾウの繁殖

徳山支部 藤原 果 南

(周南市徳山動物園)

周南市徳山動物園では2頭のスリランカゾウ、ミリンダとナマリーを飼育しています。昨年で当園に来園して10年となりました。現在、私たちはゾウの繁殖に取り組んでいます。今回はこの場をお借りして、ゾウの繁殖とその取り組みについてご紹介させていただきます。

まず始めに、皆さんはゾウの妊娠期間がどのくらいご存じでしょうか。

ゾウの妊娠期間は約22か月で、これは哺乳類で最長となります。ゾウの子どもが出生時、既に体重が約100kgもあることにも納得がいきますね。妊娠期間だけでなく、発情周期も13～18週間と長いので1年間で3～4回程度しか発情が来ないということになります。限られた少ない発情で繁殖を成功させることは容易なことではなく、また生き物ゆえに発情のパターンや周期が毎回少しずつ異なります。いつ発情が来るのかを正確に把握することが難しいため、ゾウを飼育している他園館と情報を共有し、試行錯誤しながら繁殖を目指しています。

ゾウの発情期ではLHサージが2回起こるのですが、1回目のLHサージは偽発情といって排卵を伴わないもので、交尾をしたとしても妊娠することはありません。1回目のLHサージが起こってからおよそ3週間後に2回目のLHサージが起こり、この時は排卵があるので、妊娠する可能性があるというわけです。

当園では発情周期を知るために定期的に採血を行い、雌ゾウのプロゲステロン値の測定を行っています。ちなみにゾウの採血は耳から行います。また、発

情のパターンをつかむための手がかりとして検温、行動チェックなども行っています。検温といっても直接直腸温度を測定することは難しいので雌ゾウが排便した際にすぐにその便に体温計をさし、温度を測定します。発情が近くなると雄ゾウは雌ゾウの尿や陰部付近を頻りに嗅ぐようになるため、これらの行動をゾウの担当者は見逃さないように目を光らせます。時間、回数、場所などを記録し、これまでの発情時のデータと比較しながら発情を見逃さないように細心の注意を払って飼育しています。毎日の積み重ねが実を結んで、いつかミリンダとナマリーと子どもの親子3頭で仲良く暮らしている姿をみることができればいいなと期待しています。

今回はゾウの繁殖について簡単ではありますが、ご紹介させていただきました。徳山動物園にご来園の際にはゾウの行動に注目してみてくださいね。今回ご紹介した行動をみることができるかもしれません。



ゾウのミリンダ
とナマリー



採血風景

訃報

福島和彦先生のご逝去を悼む

山口支部長 藤原宣義



山口支部会員の福島和彦先生が11月24日に逝去されました。享年68歳でした。

先生は昭和52年に日本獣医畜産大学を卒業後同年4月から山口県技術吏員として県下の家畜保健衛生所や畜産課及び農林総合センター畜産部で家畜防疫や畜産振興並びに畜産行政等に活躍され、平成27年に山口県を退職されました。

同年6月から平成30年まで山口県畜産振興協会専務理事として県下の畜産振興に寄与されました。

また、昭和24年から26年6月まで山口県獣医師会理事を、令和元年から同3年6月まで山口県獣医師会常務理事を、昭和29年から現在まで山口県獣医師会山口支部の監事として獣医師会の発展に努められました。

先生は令和3年11月に肺癌が見つかり、令和4年1月に放射線治療、3月に手術を受けられ、順調に回復され平穏に過ごされていました。

今年3月に右股関節の痛みで、近医を受診して、変形性股関節症と診断され、熱心にリハビリに通っておられましたが、5月に肺炎で入院され、その後通院されていましたが、7月末に、肺がんの股関節への転移だったことが判明しました。

放射線や抗がん剤治療を行いました。効果が得られず、10月半ばより在宅医療の専門医や訪問介護の支援を受けながら穏やかに過ごされていました。

11月24日の深夜、ご家族に見守られる中、ご自宅で最期を迎えられました。

葬儀等にご家族で済まされ、12月1日に奥様から連絡を受け、5日に田中会長、酒井常務とともに弔問に伺いました。

謹んでご冥福をお祈り致します。

お知らせ

第1回小動物講習会

- ・日時：令和6年1月14日(日) 10時～16時(開場：9時30分)
- ・会場：防長苑 2階孔雀の間(山口市熊野町)
- ・講師：TRVA動物医療センター(東京都) 院長 塗木貴臣 先生
- ・演題：2023年版 勝手に救急のいろは～救急診療現場のリアルをお届け～
- ・申込：令和6年1月10日(水)までに獣医師会事務局に申し込んでください。
- ・参加費：本会会員：無料、学生：千円、動物病院スタッフ：2千円、その他(一般)：3千円
- ◆ランチョンセミナー
 テーマ：GE超音波診断装置のご紹介
 機種：Versana Balance・Premier、LOGIQ P10、Vscan Air CL/SL
 担当者：GEヘルスケア・ジャパン株式会社超音波本部 小泉俊之 氏

お知らせ

今後の主な行事(予定)

- 1月11日 ・総務委員会(県獣会館)
- 1月14日 ・第1回小動物講習会(防長苑)
- 1月21日 ・ニューレジリエンスフォーラム山口大会(かめ福オンプレイス)
- 1月25日 ・第4回理事会(県獣会館)
- 2月15日 ・第2回支部長会議(県獣会館)
- 2月25日 ・第2回小動物講習会(県獣会館)
- 3月14日 ・第5回理事会(県獣会館)

事務局だより

- 12月1～3日 ・第41回日本獣医師会獣医学術学会年次大会(神戸市)
- 12月7日 ・第2回小動物部会委員会(県獣会館)
- 12月12日 ・ニューレジリエンスフォーラム山口県呼びかけ人会(かめ福オンプレイス)
- 12月19日 ・会報編集委員会(県獣会館)
- 12月21日 ・第7回県獣医師会館検討会議(県獣会館)
- 12月21日 ・山口獣医学雑誌第50号発刊記念座談会(県獣会館)
- 7日・21日 事業推進会議

次回編集委員会 1月30日(火) 13:30～

山口県獣医師会会報 第752号 令和6年1月10日(毎月1回発行)

発行所 (公社)山口県獣医師会(〒754-0002 山口県山口市小郡下郷1080-3)

電話(083)972-1174 FAX(083)972-1554

e-mail:yama-vet@abeam.ocn.ne.jp

http://www.yamaguchi-vet.or.jp

編集責任者 豊川 剛

発行責任者 田中 尚秋

印刷 コロニー印刷